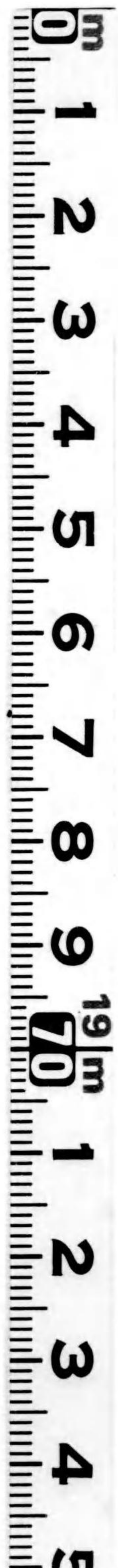
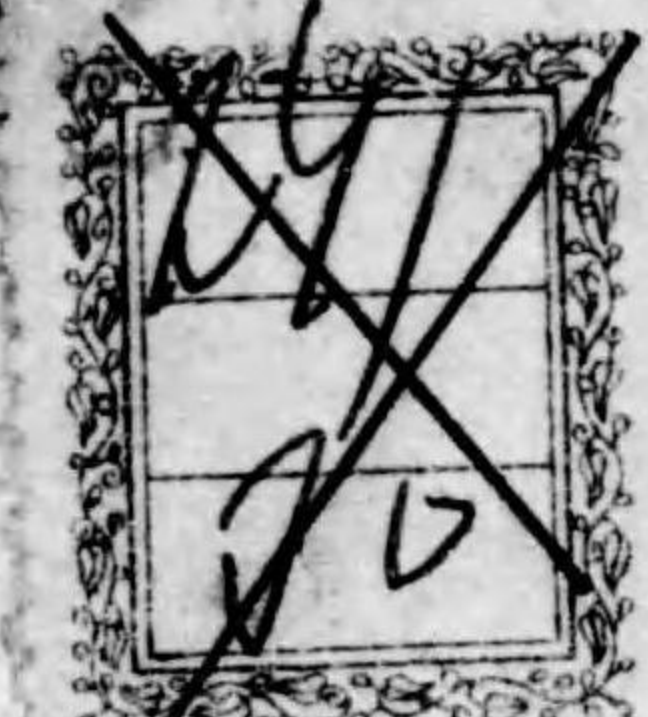


心の糧

島崎藤村序
島崎秀雄著



始



心

の

糧

心
の
糧

持100
326



島崎秀雄

正 猷
11. 8. 19
内交

心の糧

島崎秀雄

心の糧の序

兄の書いたものゝはじめに弟が序の言葉を添るといふは、めづらしいことでもない。世には兄弟の協力によつて成つた著述さへある。しかし私達兄弟のやうに全く相異なつた方向を取つてこの世を歩いて來たものには、斯うした小冊子の上で一緒になるといふことも、弟として何か書けと言はれることも、めづらしい心地がする。まして兄は六十五歳で人に見せるつもりもなかつたこの自省録が圖らず出版者を得たのであり、さういふ弟の私が既に五十一歳にもなるのだから。

私達は四人あつた兄弟の中の二人で、秀雄はその年長の兄にあたり、私は一番末の弟にあたる。亡くなつた姉妹を合せれば私達は七人になる。私達の父、正樹は熱心な子弟の教育者であつたから、姉でも兄でも何かしら父の感化を受けないものはなかつた。私は未だ幼少な時分に、父の書き與へた『三字文』や『勸學篇』を習ひ、『孝經』、『論語』などの素讀を受けたことをよく覚えて居る。私が九歳で父母の膝下を離れ東京に遊學した時、父から餞別として贈られた數葉の短冊の言葉が悉く實踐躬行を説いた教訓でないものはなかつたことをよく覚えて居る。その私が今、兄の自省録を開いて見ると父から受けた深い感化を忍ばずには居られない。私はこの『心の糧』

を通して、隨所に父の聲を聞きつけるやうな思ひもする。

この父の影響は、私達兄弟に取つて自分等の長所ともなれば、また短所ともなつた。もし兄がこの書にあらはれて居るやうな日常の言行を省思する人でなく、實踐道德に耳を傾けるやうな人でなく、簡易生活を愛するやうな人でなかつたら、おそらく實業家としての兄はもつと自由に大膽に自己の生涯を開拓し得たかも知れない。そのかはり、斯うした『心の糧』も生れて來なかつたかも知れない。

この書は六十年もかゝつてこの世を旅した人の心から出た汗である。假令この書の中にある言葉の多くが、既に言ひ古された『真理』であるとしても、夜毎の燈火の下に記されたやうな處世の銘の一つ

『心』には、人生行路の案内ともなるものがあらう。私はこの『心の糧』の著者としての兄がそれほど多くを望むものでないことを信ずる。おそらく自分の親戚のものに讀ませ、親戚の子供等に讀ませるための小さくも二つとない贈り物であらうと思ふ。

大正十一年七月

島崎藤村

緒言

余、爾來物に觸れ、事に感じたる所のものを、隨意筆に委せ、斷片的に録し、以て日常の言行を三省鑑戒して自ら鞭撻の資に供しつゝありしもの、即ち本書なり。素より其載する所、錯雜混淆して、井然觀るべきものなしと雖も、概ね先人の金言を祖述して専ら繁を去り簡に就き、其餘響合蕃を言外に需むるを以て主となす。讀者幸に之を諒せられよ。

大正十一年七月

島崎秀雄識

心の糧目次

一	實踐躬行……………	一
二	交際の定義……………	一
三	境遇の順環……………	二
四	掛換のなき人は上乘……………	二
五	運動の方法……………	三
六	職業に尊卑なし……………	三
七	窮すれば通す……………	四
八	失敗の善後策……………	四
九	豪い者に成りたがる者は豪いものにあらず……………	五

一〇	成功の秘訣……………	六
一一	女子の大事業……………	六
一二	書籍は心の糧なり……………	七
一三	成功の骨子……………	八
一四	休息の定義……………	八
一五	必要品は廉價なり……………	九
一六	交際の眞味……………	〇
一七	學問は消化を尙ぶ……………	〇
一八	佛法の目的……………	一
一九	時と場合は是非を異にす……………	二
二〇	挫折は死滅なり……………	二

二一	人生の第一要義……………	三
二二	人を相手にせず天を相手とす……………	四
二三	落ちる時は思ひ切つて落ちる……………	四
二四	事業 本位……………	五
二五	華を棄て果を收む……………	六
二六	常に反面を顧るべし……………	七
二七	時勢と時弊との區別……………	七
二八	法螺吹嘘搗の解……………	八
二九	繼續は成功の基礎なり……………	八
三〇	積極と消極と密着……………	九
三一	貧富の區別……………	〇

三二	奮闘は愉快なり……………	二〇
三三	簡易生活は人格を高尙ならしむ……………	二一
三四	口の人と手の人……………	二一
三五	執着心を去れ……………	二二
三六	含蓄の威力……………	二二
三七	愛嬌の勢力……………	二三
三八	笑て困難と闘ふ……………	二三
三九	人間の要素……………	二四
四〇	眞の困難……………	二四
四一	自動的は主となる……………	二五
四二	提灯に釣鐘は滑稽……………	二六

四三	労働は苦痛にあらず快樂なり……………	二六
四四	精力集注主義……………	二七
四五	希望の標的……………	二七
四六	先憂後樂……………	二八
四七	幸福なる人とは希望ある健康の人なり……………	二八
四八	節儉は安樂を産む……………	二九
四九	氣概なき人は骨なき人の如し……………	二九
五〇	飢い時に粗食物なし……………	三〇
五一	人間を動かす槓杆……………	三〇
五二	感喜せしめ畏服せしむるの術……………	三一
五三	輕重を誤る勿れ……………	三一

五四	有難迷惑	三二
五五	良心	三一
五六	天分を守れ	三一
五七	地方の貧血症	三三
五八	運命	三四
五九	泣き面に蜂	三四
六〇	克己	三五
六一	希望	三五
六二	撻縱自在	三六
六三	臨機應變	三七
六四	理外の理	三七

六五	自觀的自重	三八
六六	似て非なるもの	三八
六七	順逆の鑑別	三九
六八	順境は幸か不幸か	三九
六九	心理作用	四〇
七〇	不死の靈藥はなし	四〇
七一	安心	四一
七二	流星的事業家	四一
七三	無限の進歩	四二
七四	公益と私益	四二
七五	天命を守る	四三

七六	天に順ふ……………	四四
七七	指風針的人物……………	四四
七八	餘裕……………	四五
七九	事業を楽しむ……………	四五
八〇	河童の河流れ……………	四六
八一	準備が肝要……………	四七
八二	同情の種類……………	四七
八三	貸方となれ借方となるべからず……………	四八
八四	才子と愚者……………	四八
八五	人生の眞價值……………	四九
八六	意氣に感ず……………	四九

八七	共存主義……………	五〇
八八	一本鎗……………	五一
八九	理智……………	五二
九〇	偏頗……………	五二
九一	言を棄る勿れ人を棄る勿れ……………	五三
九二	大膽さ無謀……………	五三
九三	自然の詩歌……………	五三
九四	空鐵砲は響のみ……………	五四
九五	眞の價値を知る……………	五四
九六	戮力……………	五五
九七	罪惡の源は奢侈……………	五五

九八	己の欲する所を施す……………	五六
九九	隗より始む……………	五七
一〇〇	宇由觀と人世觀……………	五七
一〇一	冷水摩擦……………	五九
一〇二	實戰家……………	六〇
一〇三	偶然ならず……………	六〇
一〇四	歳暮の感慨……………	六一
一〇五	人間の風船珠……………	六一
一〇六	人生朝露の如し……………	六二
一〇七	斷行……………	六二
一〇八	人生僅に五十……………	六三

一〇九	萬物皆詩人、皆歌人……………	六三
一一〇	克己心……………	六四
一一一	信用は資本なり……………	六四
一一二	理想と現實……………	六五
一一三	靜觀……………	六五
一一四	輕重本末……………	六六
一一五	樂天家と憂慮家……………	六七
一一六	足る事を知らざるものは富まず……………	六七
一一七	一物も新物なし……………	六八
一一八	中庸……………	六八
一二九	活氣の有無……………	六九

一二〇	塞翁が馬……………	六九
一二一	心機轉換……………	七〇
一二二	園基は人物を顕はす……………	七〇
一二三	學問は靜思にあり……………	七一
一二四	人は見掛けに由らず……………	七二
一二五	シヤン拳……………	七二
一二六	果報を待つ方法……………	七三
一二七	一環の力……………	七三
一二八	看板に偽りあり……………	七四
一二九	老青年と若老人……………	七四
一三〇	大を受くるものは小を取らず……………	七五

一三一	恐るべきものは恃むべし……………	七五
一三二	何んでも出来る人は何事も出来ぬ人なり……………	七六
一三三	智力は萬能にあらず……………	七六
一三四	自ら死す……………	七七
一三五	人間の痼疾……………	七八
一三六	坊主憎ければ袈裟まで憎し……………	七八
一三七	主観的……………	七九
一三八	一切惟心造……………	八〇
一三九	平等……………	八〇
一四〇	平凡の人も大事業の資格あり……………	八一
一四一	附力……………	八一

一四二	累積の功……………	八二
一四三	極端と極端……………	八三
一四四	分割と總計……………	八三
一四五	義務の貴重……………	八五
一四六	名譽の失敗……………	八五
一四七	人間の線香花火事業……………	八六
一四八	危険とは何ぞや……………	八七
一四九	昏環は天地の大法則……………	八八
一五〇	人爲の變通……………	八九
一五一	真相を知る……………	八九
一五二	閑話と要談……………	九〇

一五三	源を原ゆる……………	九〇
一五四	我は我たり汝は汝たれ……………	九一
一五五	無事は人を殺す……………	九一
一五六	運に服す……………	九二
一五七	世に無代價の物なし……………	九二
一五八	爲すなきを恥づ……………	九三
一五九	幸 福……………	九三
一六〇	未來なきは悲むべし……………	九四
一六一	愛物喪志……………	九四
一六二	平均の力……………	九五
一六三	夢 中……………	九五

一六四	心理的壯者……………	九五
一六五	天の宣告は最後なり……………	九六
一六六	時の價價……………	九六
一六七	一利一害……………	九七
一六八	賤業も恥づるに及ばず……………	九七
一六九	足元の注意……………	九八
一七〇	人様々世様々……………	九八
一七一	意志薄弱……………	九九
一七二	常識……………	一〇〇
一七三	社交術……………	一〇〇
一七四	一切是空……………	一〇一

一七五	力 負 け……………	一〇一
一七六	播種者と收穫者……………	一〇二
一七七	目的は結果に副はず……………	一〇二
一七八	危険もなし安全もなし……………	一〇二
一七九	強者強ならず……………	一〇三
一八〇	屈服と心服……………	一〇三
一八一	憂しと見し世ぞ今は戀しき……………	一〇四
一八二	事變の準備……………	一〇四
一八三	反 理……………	一〇五
一八四	自然解決……………	一〇六
一八五	間接の利益……………	一〇六

一八六	餅屋には餅……………	一〇七
一八七	大人と小人との區別……………	一〇七
一八八	適意……………	一〇八
一八九	死中活あり……………	一〇八
一九〇	安心も亦不満足……………	一〇九
一九一	樂觀……………	一〇九
一九二	慈善……………	一一〇
一九三	近眼……………	一一〇
一九四	時季は生氣を生ず……………	一一一
一九五	人焉んぞ瘦くさんや……………	一一一
一九六	質より應用……………	一一二

一九七	光澤は研磨より生ず……………	一一二
一九八	間歇的狂人……………	一一三
一九九	小人物……………	一一三
二〇〇	小事は大事……………	一一四
二〇一	黄金萬能主義の弊害……………	一一四
二〇二	健康……………	一一五
二〇三	時を殺す者は人を殺す……………	一一五
二〇四	述懐は慰藉なり……………	一一六
二〇五	利害相伴ふ……………	一一六
二〇六	處世の要諦……………	一一七
二〇七	境遇の威力……………	一一八

二〇八	成金の活動寫真	一一八
二〇九	皮肉なる經濟	一一九
二一〇	油断を誠しむ	一二〇
二一一	衝突と摩擦	一二〇
二一二	耳の學問と手の學問	一二一
二一三	拘欄の極は平淡	一二一
二二四	消極に守り積極に進む	一二二
二二五	程 度	一二三
二二六	椽の下の力持ち	一二四
二二七	禍 福	一二五
二二八	小結果と大結果	一二六

二二九	望む所に來らず望まざる所に來る	一二六
二二〇	多忙は幸福	一二七
二二一	自ら知る者は智	一二八
二二二	理想と實際	一二八
二二三	人の善 惡	一二九
二二四	達 觀	一二九
二二五	使用すれば發達す	一三〇
二二六	完全は得難し	一三〇
二二七	含蓄は感興を惹く	一三一
二二八	達人の眼光	一三一
二二九	ソクチン療法	一三二

二三〇	天は必要を産出す……………	一三二
二三一	喬木に風當り強し……………	一三三
二三二	活動は天性……………	一三四
二三三	境遇は鑄型の如し……………	一三四
二三四	極端と極端とは類似……………	一三五
二三五	繼續は事業の骨髓……………	一三五
二三六	捕らぬ狸の皮算用……………	一三五
二三七	長短の標的……………	一三六
二三八	酒を沾て尻を切られ……………	一三六
二三九	長所は短所……………	一三七
二四〇	人は物を使はず物に使はる……………	一三八

二四一	趣味の眞諦……………	一三八
二四二	無報酬の價値……………	一三八
二四三	表裡顛倒……………	一三九
二四四	言を失はず人を失はず……………	一三九
二四五	運の去來……………	一四〇
二四六	位置の勢力……………	一四〇
二四七	正 反 對……………	一四一
二四八	大 經 濟……………	一四一
二四九	覺悟と實行……………	一四二
二五〇	忘るべし忘るべからず……………	一四二
二五一	新 陳 交 迭……………	一四二

二五二	親 友……………	一四三
二五三	人は顔ぶ度に大きくなる……………	一四三
二五四	呑むべく呑まるべからず……………	一四四
二五五	難易は心理的作用にあり……………	一四五
二五六	發明家の失敗……………	一四五
二五七	殺人の種類……………	一四六
二五八	御舍利様……………	一四七
二五九	何事も覺悟が必要なり……………	一四八
二六〇	抵抗衛生……………	一四八

心の糧目次 畢

心の糧

島崎秀雄識

一 實踐躬行

良薬も服用せざれば、効果なく、金言も實行せざれば、價值なし。
 一心不亂に、湯の盤の銘（苟日新日日新又日新）を、自ら實地に踐
 行すべし。

二 交際の定義

交際の間口廣くして、奥行の狭きよりは、間口の狭くして、奥行の深からん事こそ望ましけれ。百人の交友あらんよりは、寧ろ、一人の親友あるに如かざるなり。同情なき交際は、水なき井の如し。

2

三 境遇の順環

人間の境遇は、恰も、天候の如きか。雨降りの日も、永くは續かず、又、晴天の日も、ソー、永くは續かぬものなり。逆境に陥るも順境に在るも、亦、然り。人事の變遷は、自然の勢なればなり。

四 掛換の無き人は上乘

人は、其地位の尊卑、仕事の高下に係らず、到る處、必要缺くべからざる人となれ。尙ほ、進んで到る處掛換かけかへのなき人となれば、更に上乘なり。

五 運動の方法

運動は、經濟的運動、即ち、平民的運動をなすべし。徒らに、散策するよりも、寧ろ庭園の掃除でもするがよい。

六 職業に尊卑なし

職業に尊卑ある事なし。其人の人格に依つて、尊卑の、區別の生

3

するものなり。崇高なる心事を以つて、従事すれば、如何なる職業と雖も、崇高ならざるは莫し。

4

七 窮すれば通ず

窮すれば通ず、とは、自然に通ずるの意味には、非ざるべし、窮すれば、方向を轉ずるの手段を取ればなり。軌道の河に沿ふて遡り終に、隧道を穿つて、難關を越ゆるが如きものなり。勢ひ極れば必ずず變ずと、宜なる哉。

八 失敗の善後策

一度、泥中に陥たならば、仕方がないから、靜かに時機の來るを待つて、其境遇を、脱出するの外はない。焦慮つて、藻搔けば、藻搔く程、益々深みに陥り、遂に、救ふべからざるに到らん。

九

豪いものになりたがる者は

豪いものにあらず

凡そ人は喜んで、他人を引立つる事はすれども、押上げる事を嫌ふものなり。宛も、井の釣瓶の如し、自分の位置位までは、引立つれども、自分の地位以上は、押上げる事を、忌むの傾きあり。是れ畢竟、自分が、比較的豪い者に成りたがるより、生ずる所なり。

5

一〇 成功の秘訣

成功の秘訣は、曰く克己、曰く決心、曰く堅忍、曰く同情、曰く親切、曰く節儉、是なり。才能稱するに足らず、才能の人にして、否運の巷に、呻吟しつゝあるもの、枚擧に違あらず。天才取るに足らず、効果なき天才は、珠を、囊に包んで、光輝を發揚せざるもの如し。教育、未だしなり、相當の教育を有する、無用の長物、世間に充滿すればなり。

一一 女子の大事業

女子の大事業は、子を産むにあり。大成功は、子を、能く育つるにあり。子を産み、子を教育すれば、女子事業の、大成功者なり。其辛苦、其苦勞、謂ふべからざるものあり。

一二 書籍は心の糧なり

人の身體に、一日も、滋養物の缺くべからざるを知らば、亦、精神にも、滋養物を、供給する事を、一日も、忽諸に付すべからず。彼は、有形的にして、此は、無形的なるの區別あるのみ。三度の食事を、廢すべからず、と共に、心的營養不良に陥るべからず。西洋の誌にも、書籍は心の糧なりと、宜なる哉。

一三 成功の骨子

成功の秘訣は、事業本位を以つて、奮闘するにあり。事業を視る事、吾が子の如くなれ、吾が子を愛するの情を以つて、事業を愛し、吾が子を養成するの親切心を以つて、事業に、親切を盡す時は、成功せざらんと欲するも、焉んぞ、得んや。

一四 休息の定義

休息は、何も爲さず、空く、手を束ねて居る意義に、解すべからず。現在の仕事を、休止して、更に、他の仕事に、移るものと、解

釋するを要す。請ふ、看よ、長い長い休息は、却つて、苦痛にして眞の休息には、あらざるなり。

一五 必要品は廉價なり

極く、必要のものは、澤山にして、廉價なり。即ち、米、鹽、綿織、等の如きもの、皆然り。況んや、日光、空氣、清水、の如きは幾んど無代價なり。總て、比較的、高價のものは、必須のものにあらずして、贅澤物なり、廉價のものこそ、必須のものなり、天の配劑、眞に妙なる哉。

一六 交際の眞味

牡丹餅は、始め一口は、非常に甘い、直ぐ鑿めきが来る。鯛すまわは、始め何の味ひもなけれども、噛むに随つて、段々甘味が生じて来る。人と交るに、牡丹餅交際より、鯛交際なるかな。

一七 學問は消化を尙ぶ

學問の効果は、消化にあり、無暗に、學問を、詰め込んで、消化せざる時は、腸胃を害して、學問の食傷となり、之が爲に、却て、其身を誤るに到る。世間、學問の食傷病に罹る人、鮮からず。兎角

人間は、慾張つて、詰め込みたがり、消化を、忽にして、有形的、無形的、胃病患者、大多數なり。是れ、良薬の中毒、と謂はざるべからず。

一八 佛法の目的

佛法の目的は、離苦得樂にあり。離苦得樂を得るには、轉迷開悟にありと。果して、然らば、轉迷開悟は、何に依つて得らるゝか曰く、足る事を知つて、到る處、満足すにあり。是れ、消極的知命樂天の法にして、安心立命の境に、到達するものなり。

一九 時と場合は是非を異にす

時と場合とは、同一の事柄に於て、正反對の結果を、來す事あり正乎・邪乎、是乎、非乎、是れ、其事柄にあらずして、其時と場合とに由つて、正邪是非の、決するものなり。恰も、人を殺すは、罪惡なれども、戦争の時に於ては、却つて、之を以つて、忠勇の名譽となるが如し。人生萬事、皆、爾らざるはなし。

二〇 挫折は死滅なり

挫折は、死滅なり、一難を経る毎に、更に、一段の彈力を、加へ

ざるべからず。逆境に在る人は、苟も、希望を懷き、他日の光明を望んで、心中に、愉快を感じ、ナアーニ今に見ろ、の覺悟を以つて何事をも、見流し、聞流して、忍耐、邁往すべきなり。最後まで、忍耐し得る人は必らず救はるゝと、善哉、言や。

二一 人生の第一要義

獨立自活は、先づ、人生の第一要義なり。獨立自活の道立たざるものは、恒に、心神煩悶懊惱して、何事をも、なす能はず、殆んど病人と異なる所なし。徒らに、煩悶懊惱するも、何の効あらんや。唯だ、勇奮勤勉節儉、以つて、獨立自活を圖るべきなり。安心立命も

亦、此中にあつて存せり。而して、靜かに、時機の來るを待つべし
是れ、人事を盡して、天命を俟つ、正當の順序なり。

二三 人を相手にせず天を相手とす

世の中は、餘り、現金主義にて、近視眼の人のみ、衆く、遠視眼
の人は、甚だ尠なし。人を相手にせず、天を相手とすべし。天は正
直なれば、天に貸し、天に預けるの覺悟を、以て働くべし。斯の心
あれば、世に不平も起らず、恒に愉快に活動し得らるべし。

二三 落る時は思切つて落る

人間は、落る時は、思切つて落ち、真底まで、沈まねば不可な
り。生中、なまなか途中に、彷徨して居ては、一生浮ぶ瀬はない。底の底ま
で、落ちて仕舞ふ曉は、最早、已に浮ぶ運命に、向つて居るもので
ある。

二四 事業本位

金を儲ける事のみを目的として、事を爲すは、順序を、轉倒した
るものなり、事業に成功すれば、必然の結果として、其功勞の多少
に由つて、之に伴ふ利益は、自ら、享得せらるべし。金錢の爲に働
かず、事業の爲に働け。即ち、目的は何であるか、金錢であるか、

將た、仕事であるか、先づ、之を決定せよ。而て、其一點を捉へて何事にも、忍耐し、我慢して、馬車馬的に、驀進すべきなり。

二五 華を棄て果を收む

從來、吾が事業の遣り方は自ら、大將の位置に立つて、頼朝となりて、事を爲したれば、失敗の原因をなせり。自今、大江廣元となりて、頼朝をして、其名を成さしめ、自ら、幕府を創設するの實を擧ぐべし。名を避けて、實を取り、華を棄て、果を收むるを以つて、本領となすべし。

二六 常に反面を顧るべし

順境に在て、得意の時は、須く、其反面を想ふべし。逆境に居て失意の時も、亦、須く、其反面を想ふべし。勢ひに制せられず、勢を制するの心掛け、恒に肝要なり。

二七 時勢と時弊との區別

時勢に順ふは、必要なれども、時弊に陥らぬは、亦、最も必要なり。時勢に順ふの口實を以つて、時弊に陥りつゝあるもの鮮からず。

二八

法螺吹嘘搗の解

法螺や嘘は、愚物には出来ぬ業なり。時と場合とに依つて、法螺を吹き、嘘を言ふも善し。然れ共、其法螺や嘘を、實踐躬行して、眞の法螺吹きや、眞の嘘搗きとなる莫れ。

二九

繼續は成功の基礎なり

志を立つる事は、易けれども、之を永續して行く事は、中々、困難の業にして、容易の事にあらず。決心と堅忍とは、車の兩輪の如し。相待つて、始めて、進轉の効を奏するものなり。佛法でも、發

心繼續と云つて、發心に亞ぐに、繼續の必要を説いて居る。堅忍繼續してこそ、茲に、始めて、立志の美果を見るを得べきなり。

三〇

積極と消極と密着

同名相衝き、異名相引くとは、電氣學の原則にして、積極と積極と接し、消極と消極と接すれば、互に衝突し、之に反し、積消兩者は、必ず、相引て、密着平均するものなりと、男女、夫婦の間柄、交友双互の性情に於ても、此の電氣學の原則に、自然暗合する處のものあるを見る。積極と積極とは、衝突し易くして、却て、積極と消極とに於て、密着の交情を保つを得るが如し。

三一 貧富の區別

諺にも、満足する人は、富めりと、足る事を知らざるものは、終生醒醒として、歡喜の天地に、接するの日なし。身富むと雖も、心常に貧しく、財貨の少きもの、貧しきにあらず、多くを需要するもの貧しきなり。

三二 奮闘は愉快なり

最大の愉快は、最大の奮闘なり。苦後樂あるのみならず、苦中樂ある事を知らざるべからず。況んや、苦、即ち、樂たる如き場合さ

へ、無きにしもあらず。

三三 簡易生活は人格を高尙ならしむ

生活の贅澤と複雑とは、罪惡の源なり。人間生活中、最も高尙なるものは、簡易生活に如くものあらず。全體、收入已上に、物品を購入するの權利なきは、當然の理法なれば、斷乎として世の譽に倣はず、自家の分限を守り、奮闘すべきなり。古人云はずや、菜根を咬み得て、百事成すべしと。

三四 口の人と手の人

人間に二種あり。一は口の人、一は手の人、則ち是なり。喋々と
して、常に、軍事を談ずる講談師は、戦ひに巧みなるものにあらず。
古人云はずや、言者行はず、行者言はずと。

三五 執着心を去れ

兵法に、得て有する勿れ、居て守る勿れと、至言と謂ふべし。人
間萬事、此の執着心を排除すれば、却て、得て有する事を得、居て
守る事を得るに至るものなり。

三六 含蓄の威力

云ふべき事を言はずして、却て、其品性を高むる事あり。此の詩
的態度は、一種異様の威力を具有して、萬言一默に若かざる場合あ
り。

三七 愛嬌の勢力

笑ふ事は、高等動物たる人間にのみ附與せられたる、天與の特權
にして、愛嬌は、一種の勢力なれば、處世、必要の武器なり。之を
巧に利用すれば、其効、蓋し、鮮なからざるべし。

三八 笑て困難と闘ふ

一切惟心造とは、佛法の要語なり。難關に在て、煩悶懊惱する時は、到底、局面を轉開し難し。人は、笑ふて困難に處するの度胸なくんばあるべからず。

三九 人間の要素

有形的三要素、即ち、衣、食、住、是れなり。無形的三要素、即ち、智、情、意、是れなり。此の六要素を、具備すれば幸福の人なり。

四〇 眞の困難

困難にも、比較的の困難と、絶對的の困難あり。即ち、空想上の

困難と、實際上の困難あり。人の困難と云ふものの多くは、空想上の困難にして、實際上の困難は、甚だ多からず。然れども、如何に精神的に解釋するも、衣食住の三者は、到底、物質的の範圍を脱すること能はず。

四一 自動的は主となる

人間は、到る處、常に、主となるの工風肝要なり。自動的なれ、他動的なる勿れ。隋力だうりきに制せらるゝものは、恰も、降り坂に車の駛はしるが如く、思はざる處に奔逸せざるを得ざるに、到るべし。

四二 提灯に釣鐘は滑稽

世の中の事は、何でも釣合の宜きを得て、始めて美なり。九尺二間の破れ長屋から、縮緬の羽織を着て出るものもあり。天秤棒を握る手に、金の指輪を、煌めかして居るものもある。不釣合の工合は、雷に、提灯に釣鐘のみならんや。

四三 労働は苦痛にあらず快樂なり

逸居の苦痛の裏面は、労働の快樂なり。閑殺の苦は、忙殺の苦よりも苦なり。

四四 精力集注主義

水滴の點々として落つるもの、一ヶ所に集注して、止まざる時は堅石も、終に、之を穿つべし。嗚呼、精力集注主義なるかな。

雨だれにくぼみし軒の石みても

かたきわざとておもひすてめや

四五 希望の標的

人は、自己の願望する事を行ひ能はざるときは、自己の行ひ得べき事を、願望せざるべからず。是れ、空想と眞想との、因て以て、

岐るゝ所なり。

四六 先憂後樂

先憂後樂は、古人の成語なり。玄冬雪六尺、寒曉霜三寸、之を凌ぎ始めて、馥郁たる梅花を看る。

四七 幸福なる人とは希望ある健康の人なり

人間、第一の寶は、希望にして、第二の寶は、健康なり。希望ありて、健康なれば愉快にして、活動し得らるべし。愉快にして、活動する人は、幸福なる哉。

四八 節儉は安樂を産む

金錢を支出せんとする時は、宜しく、先づ、其當否緩急を、熟慮審按すべし。節儉は安樂を産み、負債は危険を、醸す。小事を、慎まざる時は、大事を誤るの基となる。誠めずんばあるべからず。

四九 氣慨なき人は骨なき人の如し

人、氣慨あるを尙ぶ。智あり、才あり、技能ありと雖も、一の氣慨なき時は、事に當つて、臆する事あり。人、若し、臆する時は、才智技能ありと雖も、時に、功をなさず、骨のない人は、自ら、歩

行も出来ざるなり。

五〇 飢い時に粗食物なし

食物を、快く味はんには、食に飢えざるべからず。食慾盛んなる時は、粗食に美味を感ず。天は、労働者に美味を與ふと、萬古不易の眞理なり。

五一 人間を動かす槓杆

人間を動かすに、二個の槓杆あり、曰く恐怖なり。曰く、利益なりと、是れ、拿破崙の言葉にして、能くも人生の弱點を、見抜きたるものかな。

五二 感喜せしめ畏服せしむるの術

人を服する、必ず、術あり。其意に中するなり。其意の外に出づるなり。其意に中する時は、以つて之を、感喜せしむるに足る。其意の外に出づる時は、以つて之を、畏服するに足る。

五三 輕重を誤る勿れ

枝を折るは可なり。然れども、枝を折りて幹を枯らすべからず。角を矯るは可なり。然れども、角を矯て牛を殺すべからず。

五四 有難迷惑

諺に、最負の引倒し、と云ふ事あり。世に迷惑なるもの有難迷惑より、迷惑なるものはあらず。

五五 良心

人は、如何程善い人でも、其内部には、於以上、善い人を持つて居て、常に、内部の人より、外部の人に絶へず、忠告を試みて居る。是、則ち、良心である。良心は、忠實なる低聲の抗議者なり。

五六 天分を守れ

植物は、必ずしも、松杉の如き大木が、價值あるものとも限らず。灌木となりて、花を咲かせるも可なり。更に、小さくなりて、菊と成り、蘭となりて、香りを放つも、亦、面白からずや。人の世に立つも、亦、之と甚だ趣を同くす。

五七 地方の貧血症

地方有爲の士が、成功の天地は、都會にありとなし、争つて、地方を去るの傾向あり。故に、地方は貧血症にして、都會は、腦充血

となる。俱に、社會健全の發達にあらず。

五八 運 命

運命とは、諦あきらめらるるには、最も、都合善き名目なれども、少くとも、好運の一半は、智と勤勉との致す所にして、不運の一半は、智と勤勉を缺く所なるを知らざるべからず。世上の運不運と云ふもの裡面には、必ずや、勤怠有智無智の實あるべし。

五九 泣 面 に 蜂

運命は、壹個にて來らず。好運は、他の好運を伴ふて來り、否運

も、亦、他の否運を伴ふて來る。俚諺にも、泣面なみづらに蜂が螫さす、と宜なる哉。

六〇 克 己

克己と云ふものがなければ、善行と云ふものは、決してあるものではない。己に克つは、徳行の源にして、己に克つものは、眞正の勝利者なり。而して、己に克つの最良法は、未來の大希望を懐くにあり。

六一 希 望

希望なるかな、希望なるかな。希望は人生の最大活力なり。希望

は未來なり。心中明日あるものは、幸福なるものなり。抑ゆれども昂り、悲めども喜び、失望すれども、希望を生ず。希望なる哉、希望なるかな。

六二 擒縱自在

住る所なくして、其心を生ずべしとは、擊劍家の奥義なり。獨り擊劍家のみならず、人間萬事住まる所なくして、其心を生ずるの域に至れば、翹に閃電的の早業のみならず、抑揚頓挫、殺活自在の妙境に至らん。

六三 臨機應變

臨機應變は、處世上必要なり。深き河には長き棹を要し、淺き瀬には、短き棹を要す。長鞭却て、馬腹に及ばず。

六四 理外の理

人事は複雑なり。單純ならず。底に底あり。裏に裏あり。世に理外の理あり。打算外の打算ありて、人間自得の活學問のみ、之を、解釋するを得べし。自得の活學問は、自修するの外なし。是れ、言語文字の能く盡す所にあらず。

六五 自觀的自重

他人が、己の苦心を、知らざるを憂ふる勿れ。人の知らざる善行が、多ければ多き程、人格は崇高となり、自然に人に尊敬せらるるに至るべし。

六六 似て非なるもの

謙は弱に陥り易く、剛は頑に陥り易く、直は狭に失し易く、潔は孤に落ち易く、超然は無情に走り易く、懇切は干涉に流れ易く、磊落は非禮に陥り易し。似て非なるもの、雷たがに、此れのみならんや。

六七 順逆の鑑別

鳥は風に逆さかふて飛ぶ、然れども、羽毛に順なり。魚は流れに逆さかふて溯かほる、然れども鱗に順なり。之れ、逆に處して、却て、順なる所以なり。人の世に處するも、亦、如斯き場合あり。境遇と周囲の事情とは、順も順ならざる所あり、逆も逆ならざる所あり。

六八 順境は幸か不幸か

波瀾起伏なく、平穩無事の間、生死するもの、世に鮮からず。一生艱難の何物たるを解せざるものは、人生の滋味の大半を、喫せ

ざるものなり。艱難に遭遇せざるものは、是れ、果して、幸乎、不幸乎。

六九 心理作用

悲觀的思想に耽るときは、喜ぶべき月も、忽ち、悲むべき月と變じ、愛すべき花も、忽ち、悼むべき花と化す。光明は、徒らに暗影に蔽はれて、萬物悉く、悲哀に満たん。然れども、一轉して、之を光明の側に就て、觀察す時は、塵土も、亦、光明を放ち來らん。

七〇 不死の靈藥はなし

死は、一たび、人の免れざる所なり。唯だ其遲速緩急あるのみ、免るべからざる事を怖るゝものは、愚の極なり。嗚呼、豈、獨り死のみならんや。

七一 安心

決心と安心とは、本來一致なり。安心を得んと欲すれば、須く、先づ、決心を要す。

七二 流星的事業家

一攫千金的の運動をなすものは、忽にして、天外飛躍分限長者と

なるかと思へば、又、忽にして、奈落の底に沈み、再び元の奎阿彌きくあみと成る。彼等、相場師の類皆然り。悖て入るものは、悖て出ると、古人吾を欺かず。

七三 無限の進歩

名を成すは、常に窮苦の日にあり。事を破るは、多く志を得たるの時に依る。進む程、謙遜に、上達する程、勉強すれば、人の進歩は無限なり。

七四 公益と私益

公益と私益とは、決して、衝突するものにあらず。公益は、即ち私益にて、私益は即ち、公益なり。大なる私は、公で、公の一部は即ち、私なり。個人的事業の盛衰は、延ひいて國家盛衰の因をなす。素より論なし。

七五 天命を守る

天を楽しむ、命を知るものは、常に憂ひなし。憂へず、悲まず、心中綽々として、餘裕あれば、到る處、幸天福地ならざるはなし。請ふ、看よ。野菊が一本瘦やせ乍ら、咲いて居るも、天命を守る姿ではないか。

七六 天に順ふ

天の欲する處をなさずして、天の欲せざる所を爲せば、天も亦、人の欲する處を爲さずして、人の欲せざる處を爲すなり。天に順ふ者は榮へ、天に逆ふ者は亡ぶ。

七七 指風針的人物

意志薄弱にして、優柔不斷、徒らに、境遇に化せられて、境遇を化する事能はざるものは、恰も、懸旗の如く、浮萍の如し、飄々浪々、常に動いて定らざらんとす。如此く、胸中信ずる所なく、守る

所なきは、所謂、一種の指風針たるに過ぎず。嗚呼、憫むべきかな。

七八 餘裕

總て、事物には、餘裕なくんばあるべからず。餘り窮屈なるべからず。總て知る所を語る勿れ。總て聞く所を信ずる勿れ。力一杯の事を爲す勿れ。是れ、窮地に陥るも、窮せざる所以なり。死地に陥るも死せざる、所以なり。

七九 事業を樂む

事業家が、學識經驗を要するは、勿論なれども、又、深く、其事

業を樂むの域に至らざれば、充分なりと、謂ふべからず。熱心に従事すれば、自ら、趣味も湧き、樂みも生じ來らん。事業、即ち、生命なり。生命、即ち、事業なりの妙境に至らざるべからず。知之者不如好之者、好之者不如樂之者。

八〇 河童かわづむの河流れ

物は、其長ずる所に於いて敗る。是れ、畢竟、油斷と云ふ大敵を防禦せざるに依る。水に溺るるものは、河童なり。木より墮るものは、猿猴なり。

八一 準備が肝要

失敗の原因は、一ならずと雖も、多くは、目的と手段と調和せざるによる。天に登らんと欲するものは、宜く、先づ、輕氣球の用意なかるべからず。大洋に航せんと欲するものは、亦、宜く先づ、蒸汽船の準備なかるべからず。

八二 同情の種類

同情にも、二種あり。女性的同情と、男性的同情、是れなり。女性的同情は、憐愍主義にして、ホンニ可愛想だ、何とかしてやれ底

のものなり。男性的同情は、勇俠主義にして、彼の男は、ドウカ成
功させたい底のものなり。

48

八三

貸方となれ借方となるべからず

物質的にも、精神的にも、借方となるべからず、貸方となるべし。
借方は、病痾の如し、恒に苦痛を免るべからず。貸方は、甘美の如
し、恒に快樂を享くるを得べし。

八四

才子と愚者

才子多くは、意志薄弱にして、克己堅忍なる能はず。詩に、曰く

才子恃才愚守愚、少年才子不如愚、請看他日業成後、才子不才愚不
愚と。薄志弱行は、悲いかな、才子をして、愚者の後に瞠若たらし
むるに至る。

八五

人生の眞價値

人生の眞價は、長短にあらずして、深淺にあり、長くして淺き生
涯を送る人は、短くして、深き生活をなすものに對し、一大遜色あ
るや論なし。

八六

意氣に感ず

49

人を用ゆれば、疑ふ勿れ、人を疑へば、用ゆる勿れ、疑ふは迷ふの始めなり、己に疑ふ處あれば、疑心暗鬼を生じて、赤心を他の腹中に措く能はず。人生意氣に感ず、功名復た誰か論せんと。至言と謂つべし。

八七 共存主義

學者の所謂、進化の理法に隨へば、適者生存して、不適者滅亡す。即ち、強者優者は、繁生して、劣者弱者は、敗滅す、露骨に云へば、弱肉強食なり。然れども、共同生活は、人生本來の面目なり、人は、自ら助くるのみならず、亦、互に助けざるべからず。強

者の重きを擔ふは、人類の地球上に生存せん限り、易ふべからざる上天の律法ならずや。

八八 一本鎗

主觀的一本鎗の人は。上つて下る事を知らず。進んで退く事を知らず。剛にして柔なる事能はず。智にして愚なる事能はず。鋭にして鈍なる事能はず。是れ、畢竟、終局を、達觀して、利害を詳にする能はざるものなり。智慮あるものは、則ち、然らず、銳にして鈍なる處あり。智にして愚なる處あり。剛にして柔なる處あり。進んで退く處あり。上つて下る處あり。

八九 理智

情に脆もろきものは、私情に制せられて、失敗の原因をなし易し。規定は貴重たなり、毫も曲ぐべからず。規則は神聖なり、秋毫も犯すべからず。

九〇 偏頗

正直律義なる論者も、時に或は、偏頗なる論断を下す事あり。親しければ迷ひ、疎なれば適せず、近ければ誤り、遠ければ明かならざるは、古今の通患なり。

九一 言を棄る勿れ人を棄る勿れ

其人に非ずして云ふ、言を棄るなり。其人にして云はず、人を棄るなり。言を棄るものは愚なり。人を棄るものは慙おろかなり。

九二 大膽と無謀

大膽と無謀とは、相距る事、一步のみ、爾れども、其結果は、千萬里も霄たならず、天壤の差違あり。

九三 自然の詩歌

春色芳草に笑ひ、遠山緑樹に咽び、秋風紅葉を掠めて、六花寒天に躍る。四時順環して、山水趣をなし、天に明月輝き、地に白露布く、乾坤の風物一として、詩ならざるはなし。歌ならざるはなし。

九四 空鐵砲は響のみ

大言壯語の空騒ぎは、彈丸を罩めざる空鐵砲の如し。只、其響きのみ強くして、彈丸の來らざるを如何ん。實行力の伴はざる議論は、宛も、石炭を積まざる蒸汽船の如し。

九五 眞の價值を知る

金錢の價值は、金錢を失ひたる時に至て、始めて解せらる。自由の價值は、自由を失ひたる時に至つて、始めて解せらる。健康の價值は、健康を失ひたる時に至つて、始めて解せらる。

九六 戮力

一箭は折るべく、一束は折るべからず。戮力協心なるかな。

一方になびきそろひてはなすすき

風ふくときぞみだれざりける

九七 罪惡の源は奢侈

社會の風潮は、漸々、奢侈に赴き、放縱逸樂の生活を營み、亂倫不徳の行を敢て爲し、恬として顧ざるもの如し。夜靜に神澄める時、孤燈の下、考一考せよ。奢侈は罪惡の源なり、身を亡すも奢侈にあり、社會腐敗の根本も奢侈にあり。猥りに、世の風潮に、掀翻せらるる莫れ。

九八 己の欲する所を施す

人は、退て惡を爲さざると、共に、進んで善を爲さざらるべからず。消極的に己の欲せざる所を、人に施す勿れ、のみならず、積極的に己の欲する所を人に施すべし。

九九 隗より始む

他人の幸福を圖る事、熱心ならんには、期せずして、自己の幸福に達し得らるるものなり。凡て、人を相手とせず、天を相手とせよ。天を相手として、己を盡し人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし。

一〇〇 宇宙觀と人世觀

死や、生や、科學と哲學との説明する能はざる問題にして、人生の不可解は、人間が墓場に行く迄、常に片手に提^{ひっ}げて居る繼續問題

なり。知らず、宇宙は如何にして始り、如何にして終らんとする乎。宗教や、哲學や、古來二三千年来、如何斗りの進歩をなしたりしや。哲學の書は積んで、山を爲すも、宇宙は、舊に依つて混沌たり。人生は依然として、茫漠たり。嗚呼、朝露に齊き、浮游の生を保てる人類が、如何に浮き身を、窶すと雖も、吾れ自ら、我を解釋し得ずして、焉んぞ、天地の不可思議を解釋し得んや。斯る取留めもなき廣大無邊なる。茫々たる問題は、五十歳や精々百歳位の壽を保てる人間が、とても、方式的に解釋し得べきにあらず。唯だ、神智靈覺を以つて、髣髴として、纔に、其輪廓を自ら、悟了すべきのみ。

一〇一 冷水摩擦

余は廿五歳の頃より、皮膚を強くして、感冒に罹らぬ豫防として冷水摩擦を始め、五十二歳の今日に至るまで、絶へず、毎朝行つて居るが、其効能は、中々顯著なるものにして、獨り有形上、身體の健康に効果あるのみならず。無形上其精神的に及ぼす効果は、實に枚舉に遑あらず。愉快、勇氣、忍耐、勉強、等に冷水摩擦より、及ぼす効能は、鮮少なからず。冷水摩擦、或は冷水浴は、何人に係らず勵行したきものなり。

一〇二 實 戰 家

言論に勇なるものは、實行に怯なるものなり。實行家は、自家廣告を喜ばず。吠ゆる犬は噛み付かずと、眞なる哉。

一〇三 偶然ならず

貴き事は勤中より生じ、富は儉裏より來る。勤儉は向上發展の基礎なり。勤めて儉なる時は、悠々天を樂しみ、閑々世に處して、綽々として、尙ほ餘裕あり。

一〇四 歲暮の感慨

來年は來年はとて暮れにけり。落々志未成、匆々年還年。の感あり。由來人事は成り難く、敗れ易し。時に是非あり。命に窮達あり。然れども、時日と忍耐とは、桑葉をして、美麗なる錦繡に變せしむ。嗚呼、鐵的意志の向ふ處、豈、夫れ之に敵するものあらん哉。

一〇五 人間の風船球だま

恒産なきものは、恒心なしと、説き得て切なる哉。恒心なきものは、風船球の如く、翩々として、空裡に飄蕩せんのみ。

一〇六 人生朝露の如し

人生畢竟何物ぞ、人事盡く捕影の類のみ。兀々營々歸する處如何、恰も、猿猴手を伸べて、溪間の月を掬せんとするが如し。春去秋來死去生來、落花再び梢に還らず。聽て又、尾花が下の晒れ頭、人生畢竟草頭の露のみ。北邙山下骨累々。

一〇七 斷行

考へるより行へ。着手は半ばの成功なり。凡て、事は考へざるべからず。然れども、考へに耽るべからず。ブツツカッテ行て見る時

は、存外案じるよりも、産み易きものなり。餘り臆劫がるべからず。餘り臆病なるべからず。一と通り考へたなれば、勇氣を鼓して、斷乎として、實行に着手せざるべからず。

一〇八 人生僅に五十

人間職務の爲めに斃るゝは、是れ名譽の戰死なり。人生僅かに半百、何をか憂ひ、何をか怖れんや。人間到處有青山。

一〇九 萬物皆詩人皆歌人

喜べば、笑ひ、悲めば泣く。笑ふも泣くも共に歌なり。花に鳴く

鶯、水に住む蛙、何れか歌を讀まざりける。嵐は山に、浪は磯に、鳥は梢に、蟲は草に、皆、諸共に歌ふなり。天地萬物、皆、歌を讀まざるものなし。豈啻に水に住む蛙、花に鳴く鶯のみならんや。

一〇 克己心

事業の失敗は、意志薄弱の代名詞なり。苟も、意志の強固ならん事を欲せば、宜しく、先づ、克己心を養成するにあり。己に克つは萬敵を服する所以なり。

一一 信用は資本なり

資本とは、單に鑛物を精鍊したる塊物にあらず。信用は最上の資本なり。即ち、信用なきものは資本なきものと謂はざるべからず。而て、信用は個人の生命なり。

一二 理想と現實

人生の遺憾は、理想ありて、實力なきより大なるはなし。兎角、現實と理想とは、背中合せの世の中にて、高き理想は、徒らに低き現實と衝突して、理想と現實との戦争場裡なり。

一三 靜觀

天の高き處、蒼空一碧、地の廣き處、山川浩蕩、月ありて上に懸り、光芒爛たり。花ありて下に笑ふ、香馥郁たり。一たび、此の大觀に接すれば、胸宇豁然として滿目清爽たり。萬物靜に觀れば、皆、自ら得る所あり。嗚呼、壯なる哉、嗚呼、美なる哉。

一一四 輕重本末

俚諺に一文吝みの百知らずと云ふ事あり。是れ、輕重本末を詳にする能はざる結果なり。輕重本末、大小緩急を、忽にすべからず。木を數へて、森を遺すが如きは、智者の爲さざる所なり。

一一五 樂天家と憂慮家

世に樂天家あり。憂慮家あり。樂天家の眼に映するものは、隨處光明ならざるはなし、憂慮家の眼に映するものは、隨處暗黒ならざるはなし。光明の中に働く人と、暗黒の裡に老ゆる人と、其利害得失、果して、幾何ぞや。

一一六 足る事を知らざるものは富まず

足る事を知るものは、身貧しけれども、心富み、得る事を貪るものは、身富めども、心貧し。不自由を常とし思へば、世に不足な

し。

事たればたるにまかせて事たらず

たらでことたる身こそやすけれ

一一七 一物も新物なし

人間は、如何程巧者に立廻り、利巧に働くと雖も、一物をも新に造り出す事能はず。只、物の形を換ゆるの智識を有するに止まるのみ。宇宙に新物なしとは、豈、千載の眞理ならずや。

一一八 中庸

過度の沈黙は死であると共に、過度の發言は破壊なり。語に曰く、智者の口は其胸中にあり。愚人の口は其舌頭にあり。

口開けば五臓の見えるあはびかな

一一九 活氣の有無

敗將の苦心談は、枯木に造化を咲かせたる如し。成功者の失敗談は、逸事となりて異彩を放ち、言々花を生じ、行々馨を發す。

一二〇 塞翁が馬

得意の境遇も、失意の時代も、驟かに、喜憂すべからず、人間萬

事塞翁が馬なり。要は樂天的奮闘にあり。海邊の諺にも、大漁後の借金残り、と云ふ事あり。大漁後、却つて借金の残るは、抑々奚ぞや。

一三一 心機轉換

凝つては思案に能はず。心機轉換すれば、局面も、亦、自ら轉開す。餘り、一圖に凝り固りては、智慧も分別ぶんべつも出で來るの餘地なきものなり。

一三三 圍碁は人物を顯はす

圍碁の打ち方は、能く其人の性質を表はすものなり。烏鷺交闘中、作戰計劃攻守の方法等を以つて、其人を察する時は、中らずと雖も、遠からざるべし。人、焉んぞ、陰さん哉。

一三三 學問は靜思にあり

學問之道無他、求其放心而已矣、と禪流の結跏趺坐も要は、靜思にあり。放心を求むるにあり。紅塵萬丈の巷に奮闘健戰するものは、時に古沼水靜に白鷺眠るが如き、大擺脫の時なくんばあるべからず。

一二四 人は見掛けに由らず

人は、存外、其見掛けに由らぬものなり。外貌と内容とは、却て、反對するものあり。皮膜の觀察は、往々其真髓を誤る事あり。書を讀むは易く、人を讀むは難しと宜なる哉。

一二五 ジャン拳

天の法則として、一物に萬善を具備させぬ事になつて居る。恰も、ジャン拳の如く、一方に勝つの權利あれば、他方に負くるの義務あり。是れ、造化は獨占と格外とを忌むの筆法ならん乎。

一二六 果報を待つ方法

果報を寢て待つは、恰も、天を仰ぎて、ダイヤモンドの墜ち來るを待つが如し。蓋し、事は來て人を求めず、我より進んで事を求むるにあらざれば、終生待つと雖も、何の果報か、之あらん。奮闘の中に時機の際會を待つものこそ、眞の果報を待つものにして、奚ぞ、寢てのみ、之を待つべきものならんや。

一二七 一環の力

團體の力は、平均の力なり。鎖の力は、環の力の最も弱きものの

力なり。一個の環の力こそ鎖の力なり。

一二八 看板に偽りあり

醫者の不養生、宗教家の不信心、學者の不徳義等、皆、酒飲の禁酒論にして、諺に曰ふ、紺屋の白袴の類なり。髮結かみゆひの髮結かみゆひはすの類なり。

一二九 老青年と若老人

人一たび希望を失うときは、忽ち、青年も、老人となりて、精神的に自殺す。一たび、希望を懐くときは、忽ち、老人も青年と化

して、活動す。人は、恰も、自轉車の如し、活動を止むる時は、即ち倒るるの時なり。

一三〇 大を受くるものは小を取らず

鷲は蠅を捕らず。大を受くるものは、小を取らず。鷲の餌は、鷲の食たらず。

一三一 恐るべきものは恃むべし

恃むに足らざるものは、恐るるに足らず。恐るべきものは、恃むべし。弱を凌ぐものは、必らず強に附く。強を抑ゆるものは、必ず

弱を扶く。

一三二 何んでも出来る人は何事も出来ぬ人なり

多方面の才子肌の人は、萬能達つて、一心足らず。則ち、何事も爲し得べしと雖も、是と共に、亦、何事をも成就する事能はず。一事一業に、専らならざれば、成功は覺束なし。一體全體、人は千手觀音にあらず。唯だ、二本の手を有するのみ。

一三三 智力は萬能にあらず

人間は、皆、自己を格外に買ひ被り過ぎる傾がある。人事複雑な

り。總て智でもつて、解釋が出来るものですか。現下の問題は、未
然後の事を、未然前に決するものなれば、枝頭枝を尋ね、葉外葉を
逐はば、際限も何もあつたものにあらず。況んや、經驗は人をし
て、臆病ならしめ、一度び、假橋から落ちたとて、爾來、鐵橋をさ
へ叩いて渡る。餘り、神經質の心配性の人にも、困つたもの哉。疑
ふは、迷ふの始めなり。斷じて行へば、鬼神も、之を避くるにあら
ずや。

一三四 自ら死す

法律上の格言に、法律は、權利の上に眠れるものを保護せず、

と、管に權利の上に眠れるのみならず、又、權利の上に、寢入死ねいじをなすものあり。時効、即ち是れなり。時効に罹る時は、權利の上に往生を遂げたるものなり。

一三五 人間の痼疾

人間には、二個の痼疾的弱點あり。一は猜疑心にして、他は嫉妬心なり。悲い哉、此の缺點は、殆んど、人間の通有性なるが如し。

一三六 坊主憎ければ袈裟まで憎し

愛する人の顔に於ては、痘痕も笑渦えくはの如し。と、既に、然らば、

憎む所の人の顔に於いては、笑渦も、亦、痘痕の如く見ゆる事あらん。方に、是れ、坊主憎まれ袈裟亦憎まるるの類なり。

一三七 主觀的

花の散るを見て歎くは、散る花に歎きあるにあらず、見る思に歎きあればなり。杜鵑の鳴くを聞きて、憂ひを催すは、杜鵑の鳴くに憂ひあるにあらず、聞く思ひに憂ひあればなり。葉の落ちるを見て、悲しむは、落る葉に悲みあるにあらず、見る思に悲しみあればなり。蟲の啼くを聞て、哀れを催ふすは蟲の啼くに哀れあるにあらず、聞く思に哀れあればなり。心喜ぶ時は、山川も我が喜びを助

け、心悲しむ時は、草木も我が悲みを惹く。

一三八 一切惟心造

無事一日如一年、多事一年如一日。一日に長短あるにあらず。一日は同じく一日なり。一年の如く思ふ一日あれば、一日の如くに感ずる一年もあり。長、果して長乎、短、果して短乎。

一三九 平等

天は、人の上に人を造らず。人々皆平等なり。月皎々として照り、風颯々として來り、花爛漫として笑ひ、鳥嚶々として轉ず。誰

か能く之を專有するものあらんや。唯だ、私有し得べきものは、窓の月、扇の風、庭上の花、籠中の鳥のみ。奚ぞ、其規模の小なるや。

一四〇 平凡の人も大事業の資格あり

スマイル氏、曰く、絶大の事業をなすには、奇術妙計あるにあらず。大才叡智を要せず。平凡なる資質の人にて爲し得らるるものなり。何となれば、熱心、事を爲す時は、目前の事物、皆善き經驗となり、是よりして、大に、開悟發明の益を得るものなればなり。

一四一 階力

隋方は素より期せざるべからざる豫算外の方なり。是の勢に驅られて、善に赴くものは、意外に、益々善に赴き、惡に趨るものは意外に、彌々惡に趨く。所謂、騎虎の勢に迫られては、智者も、其智を施すを得ず。勇者も其勇を用ゆるを得ず。仁者も其仁を行ふを得ず。

一四二 累積の功

大事は始めより大なるにあらず。小を積んで、而後大なり。積土成山風雨興、積水成淵蛟龍生、世に累積の功ほど程、偉大なるものはなし。

一四三 極端と極端

極端と極端とは、大に懸隔して、相容れざるが如き觀あれども、其實、極端と極端とは、却つて、相接近するものの如し。老人と小兒と甚だ相似たる所あり。旭日の東天に冲すると、夕陽の西山に没すると、其趣を同くせり、大晦日おほみそかの翌日は即ち元旦なり。

一四四 分割と總計

或る會社で、辨當運びの話が出た。
金の溜らぬ人

「君、それは月にすれば六十錢だが、日に割れば、僅か貳錢だ。手ぶらで来て手ぶらでかへられる。安い運賃だ。……君も配達舎に頼み給へ。!!」

金の溜る人

「君、其は日にすれば僅か二錢だが、月に積れば六十錢となり。更に年に積つて見給へ。七圓貳拾錢となる。更に更に、十年に積つて見給へ。七拾貳圓となる。夫れが重利になるから、百圓を超ゆるよ。大したものぢやないか?」

甲は分割して見、乙は總計して見る、只、一點の相違あるのみ。

一四五 義務の貴重

義務を完全に盡す事は、愉快であると同時に、又、成功である。成功とは要するに、義務を完全に盡したる結果に外ならず。

一四六 名譽の失敗

商戦は猶干戈の如し。衆寡敵せざるか、或は戰略過つて、退却せざるべからざるときは、退却するも亦、己むを得ざるなり。一時退却するも、捲土重來の餘地あるに拘らず、好んで、全滅するが如きは、暴虎馮河の勇のみ。全軍を纏めて、隊伍整々、能く退却を全う

せば、寧ろ、名將と謂ふべし、突貫のみが必らずしも、勇將にあらず。最後の勝利が大眼目なり。況んや、商戦に於いてをや。只撥ね返す力が、何處迄も必要なるのみ。故に失敗に際して、一時退却するが如きは、決して、耻辱にあらず。耻辱とは、不正不義を爲したる場合を云ふ。公明正大の手段に依つて、事業を經營して、失敗するも心中疚しき所なく、俯仰天地に愧ぢざれば、決して耻辱にあらず。寧ろ、名譽の失敗なり。

一四七 人間の線香花火事業

人間の事業も棺を覆ふて、其總決算を見るときは、殆んど、多く

は零のみ。空中に大音響を發して、火花を散せる流星的煙火事業は、何物をも留めずして、忽然、消散す。況んや、大なる音響もなく、人に知らるる所なき線香花火的事業の人多きに於いてをや。

一四八 危険とは何ぞや

何事も絶対に危険なるものなし。何事も絶対に危険ならざるものなし。何事にも、極端には必らず危険の伴ふものある事を、記憶せよ。魚は人類の食餌に備へられたる天物なり。而も、頭と尾とは食ふべからず。極端なればなり。地球は、人類の住居に備へられたる天物なり。而も、南北兩極は、住むべからず。極端なればなり。誰

か孝道を危険なりと、言ふものあらんや。而も、子を殺して親に奉ずるものあらば、危険ならずや。孝道、且つ、然り。況んや、其他をや。角を矯めんとするは可し。而も極端に至れば、牛を殺すにあらずや。自由も慎むべき處あり。拘束も止まるべき處あり。個人本位も、社會本位も、國家本位も、放任も、取締りも、皆然り。故に古人も云へり。執厥中、と而して、中庸を行ふ道は、唯、健全なる常識を發達せしむるに在るのみ。

一四九

循環は天地の大法則

循環は天地の大法則なり。地球の運行、海水の潮汐、四時の推

移、皆是なり。進まず、退かず、長く靜止するものは稀なり。萬物の盛衰、榮枯消長起伏ある、皆自然の勢にして、循環の大法則に支配せられざるものは鮮し。實に變化は造物者の大經なり。

一五〇

人爲の變通

火をけすも火をおこすのもくちの息
さますのもあたたむるのもくちの息
いり船も出ぶねもはらむ帆かせかな

一五一

真相を知る

人を知らんと欲せば、其微を見る可し。其不用意の時を見る可し。真相は却つて、此間に於いて發露せん。

一五二 閑話と要談

閑話は閑なるを厭はず。要談は要なるを要す。閑話は要談にあらず。要談は閑話にあらず。二者、豈に混同すべきものならんや。

一五三 源を原ぬる

一粒の種子、參天の大樹を含み、參天の大樹、一粒の種子を含む。

一五四 我は我たり汝は汝たれ

煩惱は、畢竟、他と長短を較するに由つて生ず。我は我たり、汝は汝たれば、他人に^{ほこ}矜るにも及ばず。又、他人を羨むにも及ばざるべし。

一五五 無事は人を殺す

無事は、實に人を殺す、閑暇は實に人を毒す。人間何物よりも爲すなきの苦痛より大なるものあらんや。

一五六 運に服す

人間は、兎角運命の命令に、忠實に服従するがよい。

一五七 世に無代價の物なし

凡て快樂は、苦痛と云へる代價を以つて、之を買はざるを得ず。而て、虚偽の快樂と眞正の快樂との差は、眞正の快樂を享けんには、代價を其以前に拂ひ、虚偽の快樂を享けんには、代價を其以後に拂ふにあるのみ。

一五八 爲すなきを耻づ

貧は羞づるに足らず、羞づべきは是れ貧にして志なきなり。賤は惡むに足らず、惡むべきは、是れ賤にして能なきなり。老は歎くに足らず、歎くべきは、是れ老て虚しく生くるなり。死は悲しむに足らず、悲しむべきは是れ死して聞ゆるなきなり。

一五九 幸福

幸福とは心理的の認識なり。自ら幸福なりと思ふは、大なる幸福なり。眞正の幸福は良心の満足にあり。

一六〇 未來なきは悲むべし

精力に餘裕なきものは進歩なし。進歩なきは希望なし。希望なきは未來なし。人の世にある未來なきより悲しきはなし。未來なくして世にある、是れ即ち、生き乍ら死せるなり。

一六一 愛物喪志

所有物を支配する人間が、却て其所有物に、支配せらるゝ傾きあるもの、鮮なからず。美好は、不祥の器なれば、愛物喪志に陥るべからず。

一六二 平均の力

平均を求むるは、宇宙經濟の一大法力にして、有情無情、皆此の法力の下に、支配せられざるものはなし。

一六三 夢 中

處生如大夢、とは眞に妙句なり。

一六四 心理的壯者

世に生理上の老者にして、心理上の壯者あり。又、生理的壯者に

して、心理的弱者あり。人は希望に生きて失望に死す。

一六五 天の宣告は最後なり

天の宣告あるまでは、自己の力の限りを盡して、屈せざる可き勇氣なかるべからず。棺中に隠居して、墓場に往く、眞の隠宅は茲にあり。

一六六 時の價值

一日を徒費するを以つて、人世の部分的自殺なるを疑ふ能はず。光陰は人を待たず。一日の空過は、一日の自殺なり。時を殺すは、

人を殺すと同罪なり。

一六七 一利一害

前足の短い兎は、山を駆登るには、重寶であるが、駆下るには不便である。長所は、則ち、短所で、人間も、矢張り、同じ理屈だ。

一六八 賤業も耻づるに及ばず

世の中の仕事は、芝居のやうなもので、或時は、殿様となり、或時は、馬の脚かしとなりて働き、毫も誇るに足らず、亦、耻づるにも及ばざるべし。其時の役割次第で、忠實に職責を全ふすれば、千兩役

者なり。

一六九 足元の注意

事は近きにあり、焉ぞ、之を遠きに求めんや。山に入つて山を見ずの類、世に鮮からず。

一七〇 人様々世様々

同じ炭素から成つても、一粒何萬圓の光彩陸離たる、ダイヤモンドもあり、一噸僅か十圓か、二十圓位の眞黒な石炭となるものもある。又、同じ石炭からでも、嫌な臭氣を發する石炭酸も採れば、

馥郁たる香水も採れる。世の中の事は、總て、輕々に、判斷の出來ぬものにして、餘程、面白い趣味の存するものなり。

一七一 意志薄弱

人間は、兎角意志の弱いもので、大に決心した事でも、段々、糸の縊りは、戻り易く、喉元過れば、熱さも忘れ易く、洵に、腑甲斐ないものだ。時々、自ら意志に鞭撻を加へずんばあるべからず。

いくたびか思ひさだめて變るらむ

たのむまじきはわがこころかな

一七二 常識

常識は、人間學の骨子なり。一心以つて萬境に應ずるにあり。蓋し、常識は、人と人と相摩擦したる際に於いて、養成せられ、發達したるものなり。豈に、偶然ならんや。

一七三 社交術

路逢劍客須呈劍、不是詩人莫獻詩。蓋し、交際の要は、人を樂ましむるにあるも、時としては、人より樂しましめらるゝは、却つて、人を樂ましむる所以なる事を、忘るべからず。

一七四 一切是空

古人、無の一字を以つて、道に入るの關門となせり。苟も、本來無一物とせば、豈、得喪に依つて、我心を動かさんや。

一七五 力負け

何事にも、餘り力瘤を入れ過ぎると、却つて、力負けをなすの例、世に尠なからず。過ぎたるの害は、尙ほ、及ばざるの害よりも甚し。

一七六 播種者と收穫者

收穫者は、必ずしも播種者にあらず。播種者は、必ずしも、收穫者にあらず。

一七七 目的は結果に副はず

有心栽花々不開、無心挿柳々成蔭。

一七八 危険もなし安全もなし

敵弾は、前哨の衛兵を傷つけずして、却て、掩蓋にある守將の頭

腦を挫く事あり。危険も強ち、危険にあらず。安全も絶対に安全なる能はず。

一七九 強者強ならず

人間には、靈妙なる心性あつて、柔能く剛を制す。故に、餘り押の強きものは、往々、反撥を激挑するを免れず。

一八〇 屈服と心服

人を服するに二種あり。屈服と心服、則ち是れなり。屈服は壓制的にして、眞に心から服するものにあらず。心服は、任意的にし

て、眞に心から服するものなり。

一八一 憂しと見し世ぞ今は戀しき

誰しも、恒に我に慊あきたらずして、他を羨む者あり。然れども、自ら其境に轉すれば、所謂、憂しと見し世ぞ今は戀しきものなくんばあるべからず。知らず、我が他を羨うらやむ間に、他は却つて我を羨みつゝある事を。

● 一八二 事變の準備

吾人は、事變を豫知する事能はざるも、豫知する能はざる事變あり。

る事を豫知するを得るなり。精神的覺悟あるものに到りては、意中の出來事には、意中の準備あり。意外の出來事には、意外の用意あり。

一八三 反理

生活せんと欲するが爲に、生活難を感じるものなり。已に生活せざらんと欲する者は、生活難を感じるの必要もなく、資格もなきものなり。然るに世上往々、生活難の爲に自殺するものあるに至ては、實に不思議の反理と謂はざるを得ず。

一八四 自然解決

難問題は、解決を急ぐべからず。時は自然に、之を容易に解決する事あるべし。恰も水掛論の眞最中に、沛然として大雨の降り來るが如し。

一八五 間接の利益

公田に雨降りて、吾が私に及ぶ。と古の支那人は謠ひたり。自我的自己主義の徒を諷殺して餘りあり。

一八六 餅屋には餅

餅屋には餅を説き、酒屋に酒を説き、郷に入つては郷に隨ひ、君子能く世と推し移る。餘り一圖なるべからず。餘り一轍なるべからず。

一八七 大人と小人との區別

噴水の高さは、其水源の高さ以上に登るべからざる如く、人は其所信以上の成功を得る事能はず。大人とは、大なる希望を有するもの、小人とは、小なる希望を有するものなり。

一八八 適意

人間は、何物よりも適意を好む。玉の輿こしに乗つて、公爵夫人となるよりも、寧ろ、手鍋を提げて、夕顔棚の下涼みに一生を托して満足するものあり。

一八九 死中活あり

人、若し死地に陥りつゝも、尙ほ、鼻歌を謠ふて、逍遙するの域に達せば、無中有を生じ、死中活を求むるも難からず。

一九〇 安心も又不満足

人間は、安心を希へども、何一つ心配なきは却つて、人間の満足する所にあらず。

一九一 樂觀

人間は、如何なる場合でも、餘り、クヨクヨすべからず。餘り、ヤキモキすべからず。莢開かば豆自ら落ちん。水到らば渠自ら成らん。

一九二 慈 善

慈善は、隱徳を以つて本となす。慈善を以つて、名譽を望むべからず。世の慈善に二種あり。一は慈善の美名に隠れて、己の利を圖るものと、一は己を棄て、全く、他人の窮愁を救ふもの則ち是れなり。

一九三 近 眼

一片雲間不相識、三千里外却逢君。

おもひきやちさとの外の旅に出て

ふるさとちかききみを見むとは

一九四 時季は生氣を生ず

凡そ何事を爲すにも時と場合とを無視する事勿れ。同一の事柄に於いて時に適する時は、生氣を生じ、場合に適せざる時は、活氣を喪ふ。

一九五 人焉んぞ度さんや

人は、始終無意識に其胸中の秘密を語る。其眼に由つて、其顔色に由つて、其眉の一昂一低に由つて、其唇吻の開合に由つて、其一

擧手、一投足に由つて、秘密を語る、人、焉んぞ度さんや。

一九六 質より應用

人間も、餘り純粹潔白にして、少しも融通の利かぬ人は、却つて世に容れられず、實際社會に活用をなさず。恰も、純金の如く、之を實用に供するには、多少の混合物を要するなり。

一九七 光澤は研磨より生ず

平穩なる海は、堪能なる氷夫を造らず、艱難は汝を玉にすと、宜なる哉。

一九八 間歇的狂人

怒る時は、一時の狂人なり。怒りに乗じて事を決行するものは、幾んど、瘋癲病院の患者と異なる所あらず。

一九九 小人物

世の中が、漸々進歩して、世智辛せちからくなるに隨ひ、人間も段々、切々細こましくなり、人に對して互に、猜疑の眼を以つて、心を讀み合ひ、其語る所は、聞かずして、却つて、其語らざる所を忖度す。是れチヨコマカした人間は輩出して、大きな人物の出で來らざる所

以ならんか。

二〇〇 小事は大事

完全なる大機關も、一點の油を缺けば、其活動運轉に、妨げあるのみならず。終には、其大機關を破壊せしむるに到らん。

二〇一 黄金萬能主義の弊害

黄金萬能主義の弊害は、澎湃として、上下に瀰滿し、其金渴熱の猖獗なる結果、今や、番人の竊み喰ひは到る所に其醜を暴露せられ、取締人を取締る取締人を要し、監督者を監督する監督者を置く

の、滑稽を演ずるも、尙、之を禦ぐ能はず、社會人心の腐敗、實に嘆すべし。

二〇二 健康

最上の衛生法は、規律を正しくするにあり。起居、飲食、活動、休息等、皆、一定不變なれば、身神恒に爽快にして、奚んぞ、病魔の侵し來る餘地あらんや。

二〇三 時を殺すものは人を殺す

時間は、人の壽命なり。之を空しく殺すものは、人を殺すと同罪

ならん。故に、時間の勵行は、自他の壽命を延長せしむる所以なり。蓋し、時間を嚴守せざるが爲に、自他生涯の空時を、積算する時は、何人も、實に多くの殺人罪を遂行したるに驚くなるべし。

二〇四 述懐は慰藉なり

人は、其胸中の苦痛を醫せんが爲に、常に不平を鳴らす。述懐は慥かに一種の慰藉なり。

二〇五 利害相伴ふ

利害相伴ひ、一利一害は、數の免れざる所。

花みせたほどはとなりへも落葉哉

二〇六 處世の要諦

現時の普通人、即ち、低級常識水平線下に在ては、何事も、イヤダと思ふ事は、之を行ひ、ヤリタイと思ふ所を慎めば、先づ以つて、處世の要諦を得たるに庶幾し、今、其一二例を擧んか。

- 節儉な簡易生活は、イヤダが之を行ふ。
- 雨の朝、風の夕も、一生懸命働くは、イヤダが之を行ふ。
- 大厦高樓を建築し、自動車で出入したいが之を慎しむ。
- 立派な衣服を纏ひ、ダイヤモンドの指輪で帝劇に往きたいが之

を慎しむ。

二〇七 境遇の威力

世に境遇程、怖しきものはあらず。境遇は實に魔力を有す。門前の小僧習はずして經を讀む。

木のもとを住家とすればおのづから

花見る人となりにけるかな

二〇八 成金の活動寫眞

槿花一朝の頼むべからざるは、忽ちにして、歩の成金となり、忽

ちにして、成金の歩に還るを見る。恰も、榮枯盛衰の理を眼前に明に示す。活動寫眞を観るの感あり。

世の中は三日みぬまにさくら哉

にしき衣たはては裸やふゆのやま

二〇九 皮肉なる經濟

經濟的眼光を以つて、達觀する時は、少ないと謂ふものは、聽て多くなり、多いと謂ふものは、聽て少なくなり、餘るものは、聽て不足し、不足するものは、聽て餘り、高きものは、聽て安くなり、安きものは聽て高くなるべし。是れ實際でもあり、眞理でもある。

經濟界の事は、随分皮肉な意地の悪いもの哉。

二一〇 油断を誠しむ

油断は、讀んで字の如し。油を断つなり。機關に油の注入を懈れば、即ち、油断で機關を摩滅す。古來不注意を戒めて油断の大敵なる事を説く。今尙ほ、其新なるを覺ゆ。而して、終古亦新なるべし。

二一一 衝突と摩擦

衝突と摩擦とは、幾んど同じ行動なり。何事も相衝突し、相摩擦

すれば、互に自ら傷くる事を免るべからず。檜山の火は、檜より出で、檜を焼く。

二一二 耳の學問と手の學問

誰しも知つて知つて知り抜いて居て、而して、事に當つて實行せざるもの、比々、皆、然り。耳の學問は易く、手の學問は難し。蓋し、實踐躬行は案外ヤサシイものにあらず。苟も實行する人こそ、眞に學を好むの士と謂つべし。

二一三 絢爛の極は平淡

絶頂に登り詰めたる時は、必ず谷底に返る。牛鍋を、ツツイタ後は、新香しんかを呼ぶ。玉殿高閣に住み、美酒佳肴に飽きたる曉は、四疊半に抹茶を賞す。絢爛の極は、平淡に歸すと宜なる哉。

二二四 消極に守り積極に進む

釋迦は、世界を娑婆だと謂ふたが、之を譯して缺陷世界と謂ふそ
うだ。

あさゆふの飯さへこわしやはらかし

おもふまゝにはならぬよのなか

己に思ふ儘にならぬが、世の常態なり、眞理なりとせば、思ふ儘に

ならぬものを思ふ儘になさんと欲するは、即ち、迷想なり、是消極的に諦觀悟道の必要ある所以なり。さもあらはあれ 遮莫、世に、思ふ儘にならぬものを、思ふ儘になさんとし、出来ない事をでかさんとすればこそ、世は進化し美化す。己に思ふ儘にならぬものを、思ふ儘にならぬと諦め、出来ない事は、出来ないと斷する時は、積極的に世は進歩發達を期する能はずして、人は、生ながら木乃伊みいとなり畢らん。或時は、消極的に守り、或時は積極的に進む。是れ、常識の必要なる所以なり。

二二五 程 度

人事百般、細大となく程度に達せざれば、是も非に變じ、程度を
超ゆれば、善も悪と化す。例へば、食物に於いて、程度に適すれ
ば、身體の健康を増進す。程度に達せざれば營養不良に陥る。程度
を超ゆれば、却つて、病を醸すが如し、實に程度問題は、日常人間
萬行事毎に、最も緊切なる重要問題なり。

二二六 椽の下の力持ち

世に椽の下の力持ち程莫迦らしきものはあらず。一將功成つて萬
骨枯る。○遮莫、椽の下の力持ち程、世に貴重なるものはあらず。雲
を凌ぐ大厦高樓も地中に深く、其基礎を築けばこそ、屹然として風

雨に耐ゆ。大事業の下には、必らずや、大なる椽の下の力持ちのあ
るを否定すること能はず。大成功の裡には、必ずや、大なる椽の下
の力持ちの潜在するを看過すること能はず。

二二七 禍 福

人間萬事塞翁が馬なり。遽に喜憂すべからず。喜悲、憂樂、禍福
は、皆、絢へる繩の如し、波瀾の如し。

宿かさぬひとのつらさを情にて

おぼろづきよにはなのしたふし

二一八 小結果と大結果

一物あれば一累を添へ、一因あれば、一果随つて生ず。左は去り乍ら、大問題にして小結果に終るものあり。小問題にして大結果を呈するものあり。聞説く、大山鳴動して鼠一疋の結果もあれば、蟻の穴より大堤防の崩壊したる結果もあり。

二一九 望む所に來らず望まざる所に來る

世の中の事は概して、妙にアベコベに出で、反對に出づるものなり。其需むる處には來らずして、却つて、其需めざる處に來る。其

望む處は、得られずして、却つて、其望まざる處を得る。故に、名譽を得んと欲するものには、眞の名譽は得られず、名譽を得るを欲せざるものに、却つて、眞の名譽は得らるべし。豈獨り、名譽のみならんや。萬事斯の筆法に由らざるはなし。古來云はずや、其善に於れば、其善を失ひ、其能に於れば、其能を失ふと。

二二〇 多忙は幸福

人、或ひは、毎日稼がねばならぬ苦痛を説く。左れど、稼がねばならぬ苦痛より、稼ぐ必要な苦痛は、時として、更に大なるものあるを忘るべからず。人、或は、貧乏隙なきを嘆ず。左れど、人間

は、多忙なるより幸福なるはなし。世の中に手持不沙汰の苦痛より大なる苦痛は、未だ是れあらず。

二二二 自ら知る者は智

觀察とは、唯だ身外の事物のみに限るが如く思ふは、大なる間違ひなり。觀は、自觀より必要なるはなく、察は自察より大切なるはなし。古人も自ら知る、之を明と謂へり。明は智を生ず。

二二三 理窟と實際

理窟は、理窟なり。實際は實際なり。世の中の事が、必ずしも、

悉く、皆、理窟通りに行はるべきものにあらず。案外は、往々、案中を制し、意外は、往々、意中を制す。如何なる達識者も、未然を洞見するの神通力は之を有せず。爾れども、真理は、何處どこまでも眞理なるを疑ふ能はず。

二二四 人の善悪

人は、葡萄酒の如し。悪しきものは年を経るに従つて、酸敗し、善きものは、年を経るに従つて、益々甘美なり。

二二四 達觀

勝地本來無定主、大都山屬愛山人。

二二五 使用すれば發達す

人、若し特殊の發達をなさんと欲する所あれば、先づ以つて、特殊の勞苦に服せざるべからず。蓋し。使用すれば發達し、使用せざれば發達せずとは、生物進化の理法である。大なる使用、大なる勞苦は、應て、大なる發達を意味す。

二二六 完全は得難し

何事も、完全は望んで得べからず。小疵を忍容するの雅量なきも

のは、遂に珠玉を得る能はず。小害を忍容するの宏量なきものは、遂に大利を逸する事を免るゝ能はず。

二二七 含蓄は感興を惹く

胡椒丸呑みでは、眞味を解する能はず、咀嚼なる哉。賣藥の能書は、深趣なく、感興を惹かず、含蓄なる哉。咀嚼盡きざる所に、妙味あり。深趣盡きざる所のものは、含蓄にあり。含蓄は感興を惹く。

二二八 達人の眼光

萬竿修竹非吾有、唯領萬竿修竹聲、人間も、斯の境に到れば氣樂なる哉。

二二九 ワクチン療法

何事によらず、毒を以つて、毒を制するは、已むを得ざるの手段なり。爾れども、ワクチン療法の結果、必ずや、副作用を起して、爲に亦害毒を被むるものある事を忘るべからず。

二三〇 天は必要を産出す

天は、必要に應じて、人物を産出すとは、社會學者の第一義な

り。起業時代には、徒手空拳、巧に資本家を動かして、會社創立に成功する起業の天才を生ず。競争時代には、反間苦肉、敵を殲して、己を利する競争の天才を生ず。合同時代には、合縦連衡、舌を鼓し、利害を説いて、獨占の巨利を壟斷する合同の天才を生ず。

二三一 喬木に風當り強し

喬木、兎角風當りが強く、人情は妙なもので、弱者を憐み、强者を嫉むが普通である。

こゝろなき風さへことにはげしけれ

ぬけいでたかきすぎのひとと

二二三 活動は天性

元來、人は動物であるから、活動するのが、其天性でもあり、其本能でもあり、又、其興味の存する所でもある。溜り水は、必ず腐敗す。人も活動せざれば、生氣消失す。流水腐らず、巨樞^{びしく}は、とは、千古不磨の眞理なり。

二二三 境遇は鑄型の如し

山高ふして、巨獸生じ、水深くして、大魚棲む、偉大なる山水は、總てをして、偉大化せしむ。

二三四 極端と極端とは類似

大算は無算に似たり。大巧は至拙に似たり。

二三五 繼續は事業の骨髓

如何なる事業も、繼續なき事業は、流星の如く、電抹の如く、水泡の如し。

二三六 捕らぬ狸の皮算用

當事^{あてごと}と權は、外づれ易く、捕らぬ狸の皮算用は、終に、雀の糠喜び

に終るもの、甚だ尠なからず。

二三七 長短の標的

事物は、見やうに由つて、大なる差違の生ずるものなり。槿花一朝、半日も保たぬ儂なき朝貌にぞありける。左れど、夏より秋に懸けて、毎朝永く盛り、久しく咲ける朝貌にぞありける。

朝なあさな花ささかへてあさがほは

さかりひさしきはなにぞありける

二三八 酒を沽て尻を切られ

人、既に場合を見るの明あれば、其術に於いて、三昧に入るに庶幾し。世間往々、好意を傾けて、悪感を買ふもの、骨を折つて叱らるゝもの、氣轉を利かして、馬鹿を見るもの、親切を盡して怨みを受くるもの、酒を買つて、尻を切らるゝもの、概ね、皆其場合を見るの明なきより生ずる處なり。

二三九 長所は短所

長所は、聽て短所で、能く戦ふ者は、兵に死し、能く泳ぐものは、水に死す。依る者は榮へ、頼む者は亡ぶ。

二四〇 人は物を使はず物に使はる

何人と雖も、少しく考へて見る時は、所有者は、其所有物を支配せずして、却つて、所有物に支配せらるゝ虞なき克はず。

二四一 趣味の真諦

多言は、感興を傷く。若し、趣味の真諦を求めば、夫唯だ、合著にある哉。

二四二 無報酬の價值

光明高潔の精神は、報酬を希はざるの精神なり。報酬を希はざるの精神は、崇高偉大なる精神なり。

二四三 表裡顛倒

身、閑にして、心却つて忙。事、少なくして、意、却つて多し。

二四四 言を失はず人を失はず

與に言ふべくして、之と言はざれば、人を失ふ。與に言ふべからずして、之と言へば言を失ふ。智者は、人を失はず、復た言を失は

ず。

二四五 運の去來

運は、現在を思ふ人を去つて、未來を思ふ人に來ると云ふが、慥かに眞理である。

二四六 位置の勢力

位置の勢力は、侮るべからざるものあり。城狐は、焼かれず、社鼠は侵されず。

二四七 正反對

逆境を、挽回せんと欲して、却つて、爲に、一層、窮境に陥るの例、世に尠からず。新聞は、報じて曰く、疾病患者が、入院料の滞納の爲に毒藥を仰ぎて、自殺したるものありと、眞に憫むべき悲劇にして、正反對の結果ならずや。

二四八 大經濟

天地は、自ら其經濟をなすとは、争ふべからざる眞理なり。

二四九 覺悟と實行

古人、歌ふて曰く、必勝の旗は、必死の陣に翻ると。

二五〇 忘るべし忘るべからず

人に施したる恩は、須く忘るべし。我が受けたる恩は、須く、忘るべからず。是れ、自他に對する金誠なり。

二五一 新陳更迭

進化論から、大觀して見ると、腐敗も、亦進歩の一道程だ。腐敗

は、舊い細胞の死を意味す。舊い細胞が死ねば、茲に新しい細胞が生れる事になる。舊い物が、ドシドシ死ぬから、新らしいものが、ドシドシ生れて來るのだ。

二五二 親友

有花固可無花可、唯悅與君携手行。會心の友に接して逍遙する時は、眞に愉快を感じ、其琴線に觸れて、無言の間に、インスピレーションを得るもの尠からず。

二五三 人は顛ぶ度に大きくなる

人は、雪達摩の如し、顛ぶ度に、大きくなる。失敗すれば、顛ぶ毎に、経験が付て、人物が大きくなる。屢々顛んで、屢々失敗すれば、益々経験が付て、其人物は、彌々大きくなるや疑ふべからず。

二五四 呑むべく呑まるべからず

何事を爲すにも、半ばまでは、抄取らず進歩せずして、苦痛を覺ゆ、半ば過ぎに至れば、案外進歩して愉快を感ず。是れ畢竟、物に呑まれて掛ると、物を呑んで掛るとに因て生ず。物に呑まれて掛るときは、苦痛にして進歩せず、物を呑んで掛るときは、愉快にして進歩す。

二五五 難易は心理的作用にあり

一本橋を渉るに、其橋下の深淺に由て、難易の區別を生ず、同じ一本でありながら、危険を感ずると否とは、橋下の事情に因る、一本橋其物の難易にあらずして、周圍の難易は、直ちに、一本橋自体其物の難易となる。

二五六 發明家の失敗

發明家が、雛形や模型を用て、成功したる事も、之を實地に應用するに方り、往々失敗に屬するもの尠からず。大を以て小を論ずべ

からず小を以て大を律すべからず。一滴の水は露となるも、一斗の水は流溢す。高い足駄を穿つも、大川は渉るべからず。

二五七 殺人の種類

人を殺すに、多種多様あり、故殺、謀殺、暗殺、自殺、目殺、嘲殺、笑殺、黙殺、等則ち是れなり。故殺、謀殺、暗殺、自殺、等は、直情徑行にて、或る意義より言へば、罪の浅い拙劣なるものなり、目殺、嘲殺、笑殺、は較々罪の深いものなり、獨り黙殺に至ては、最も罪の深い巧妙なる殺人法なりと、謂はざるべからず。

二五八

御舍利様 (烏爛蠶)

蠶兒を飼育するに、一眠二眠三眠を経て、上簇の成繭期に至り、御舍利様となりて、繭にならざるものあり。人間も亦之と齊しく、一眠の青兒時代、二眠の教育時代、三眠の活動時代、を経て、上簇の成功期に至りて、何事をもなさず、空く人間の御舍利様となりて、一生を終るもの鮮からず。蠶の御舍利様は、桑の喰ひ倒しなり、人間の御舍利様は、米の喰ひ倒しなり。

二五九

何事も覺悟が必要なり

何事をなすにも、先づ第一に覺悟が必要なり、覺悟は即ち決心なり。小さな飛火にも、吃驚して愕くは、是れ覺悟なければなり。大きな炙を點て、尙平然たるは、覺悟する所あればなり。英雄豪傑の士も、覺悟なきときは、一疋の蝶が飛び來りても、忽ち其態度を亂して、面を拂ふ。覺悟する所あれば、弱者も強者の如し、覺悟する所なければ、英雄も凡夫に齊し。

二六〇 抵抗衛生

衛生衛生で以て、極度に衛生を主張するときは、荒い風にも當るべからず、冷たい空氣にも觸るべからず、斯の如き結果は、温室の

草木然たる、柔弱なる人間とならざるを得ず。衛生の衛生たる所以は、如此きものならんや。寧ろ狂瀾と闘ひ、暴風に鞭撻て、筋骨鐵石の如き、抵抗衛生を衛生とする人にあらざれば、焉んぞ、戦後世界の競争場裡に、奮戦苦闘せんとする國民の、衛生法と謂ふを得べけんや。

心の糧 畢

大正十一年八月十五日印刷
大正十一年八月十八日發行

(定價金五拾錢)

心の糧

著者

島崎秀雄

發行者
印刷人

東京市本郷區湯島天神町一ノ八二

鈴木五郎

東京市本郷區湯島天神町一ノ八二

發行所

鈴木出版部

電話下谷一五一五番

振替東京一六〇七二番

印刷所

東京市下谷區仲御徒町三ノ四七

三興社印刷所

印刷人

鈴木五郎

191
20

終

